

メンバーは会社を定年退職した男性と主婦の約20人で、「男性たちは今までの仕事で、電気や工具、家電の工業デザインなどに携わった人たちが多く、技術面では大助かり。私たち主婦の知恵をプラスすることで、より便利で役立つ作品をめざしています」と今さん。しかし最近メンバーのなかで問題が浮上。ひとつは自分たちの活動範囲についてです。「最近、段差をなくしたい、扉を取り外してほしいなどの相談を受けることがある。しかし、それが私たちの活動範囲に入るのかという問題が出でています。できるだけのことはしたいと思うのですが、相談のなかにはお金のかかるものもあり、ボランティア団体として、どこまでお手伝いでできるのかというジレンマに悩まされています」と副会長の河江武春さん(71)は話します。そもそもひとつは、自助具が本当に障害者たちのためになっているのかということ。メンバーのひ



とりは、障害者自身から「自助具はリハビリにならない」といわれたことがあります。「障害者のなかには、健常者の使うものが使えるようになるとだめだと思っている人もいるようですが。介護具と自助具の違いを、どこでつけるのが難しいところなんですか」とは、会計を担当している上田静江さん(47)。

少しでも障害者や高齢者の負担をなくそうとやってきた自助具制作が、本当にその人のためになるのか、そしてどこまでが自助具といえるのか、結成して3年目の「セルフ」にとっていま大きな問題となっています。しかし作品を提供した人から、自分のために他人がここまでやつてくれたことはなかったと、涙ながらに感謝されたこともあります。これから問題を一つひとつクリアしていきながら、作品を提供した人たちや自助具は不必要だといっている人たちとも、



ざまな催しへの連絡会としての参加など、多彩な活動を展開しています。

「基本的に会員は、個人ではなく市町村のボランティア連絡会で、現在、大阪府内の31の市町村ボランティア連絡会が加盟。ボランティア活動をめぐるさまざまなテーマについての情報交換や研修を通じ、大阪府で活動するグループとして全体的な交流を深めています」と語るのは、代表の矢形律子さん。

今回の「第7回おおさかボランティアフェスティバル」においても、連絡会は「福祉マップの交流会」を担当。そして「これを機に、今後は地域を超えて、

◆ 大阪府市町村ボランティア連絡会 Vグルーブがネットワーキング

一昨年、大阪で開催された全国ボランティアフェスティバル。この一大イベントをきっかけに、大阪府市町村ボランティア連絡会は結成されました。

それまで大阪府内では、ボランティアグループが市町村単位で、あるいは活動分野ごとに交流することはあって

も、地域と分野を超えて全体が定期的に交流する組織はありませんでした。

そこで大阪府ボランティアセンターなどが呼びかけて一昨年7月に同連絡会は発足。現在は、地域と分野を超えた交流会(研修会)の開催や機関誌(O SAKA Vサイン)の発行、またさまざまな催しへの連絡会としての参加など、多彩な活動を展開しています。

えた連絡会ならではの、広域的な福祉マップづくりなどに取り組んでいたい」とも矢形さん。ボランティア活動のフィールドは、基本的には言うまでもなく、それそれが住む地域です。しかし21世紀に向け、より多彩に広がっていくボランティアにとって、地域を超えた普遍的な課題が山積しているのも確かなるところ。また活動の分野を超えたテーマもけつして少なくありません。大阪府市町村ボランティア連絡会はこうした課題やテーマに、ネットワークの強みを發揮してさまざまな活動と事業を展開していく予定です。

